

渡りて聞かむ雁金の声^{かりがね}

細野 哲弘

独立行政法人 石油天然ガス金属鉱物資源機構 理事長
(元 特許庁長官 元資源エネルギー庁長官)

日露戦役についてのエッセイの掉尾は、^{さいご}愈々われらが達磨さんこと、高橋是清の登場である。^{もっと}尤も、知財関係者(初代特許局長・現特許庁長官¹⁾)としてではなく、財政金融家としてである。ここまで、乏しい国力を身の丈で認識し、叡智と周到な戦略で国難に臨んだ何人かの先人の奮闘ぶりを描いてきた。その「乏しい国力」の最たるものに、戦時の国家財政を賄うための国際金融の面での^{まかな}桎梏、^{げんかい}分かりやすく言えば「海外での戦費調達^の困難」という問題があった。この戦争の成否はこれを抜きにして語ることは許されないであろう。

順次記していくが、日露が戦端を開いた時、我が国には戦費を^{まかな}賄う算段はまるでついていなかった。俗に何か必要な対応に迫られても、それに先立つ資金がない時に「^{そで}ない袖は振れない」と言うが、この時我が国は、先に「^{とるものもとりあえず}ない袖を振ってしまった」のである。そして、「^{とるものもとりあえず}押し取り刀で」その袖を作るべく奮闘したのが、時の日銀副総裁の高橋是清である。その活躍により、前後6回の海外における日本公債発行を果たし、戦費を^{まかな}賄うことができたのである。それには彼の金融財政家としての知識と豊かな海外経験に裏打ちされた英語力と胆力が、そしてユダヤ系米財界人ジェイコブ・H・シフとの「天佑とも言える偶然の出会い」が、大きく寄与したとされている。その理解は決して誤りではないが、胆力と偶然で

以って国運が切り開かれたというほどには、当時の時代背景は^{マイブ}単純ではなかった。

本稿では、彼の貢献を正しく評価するとともに、その資金調達とその成果が爾後の我が国にどのような余波を及ぼしたのかを綴ってみたい。それがこの戦役の歴史的評価にも叶うと考えるからである。

日本は、1904年(明治37年)2月、ついに対露宣戦布告し交戦状態に入った。御前会議で開戦を決したその夜のうちに、金子堅太郎が伊藤博文から対米工作のために渡米を指示されたことは前稿で触れた。その数日後、築地の料亭では、元老の井上馨、桂総理、曾根大蔵大臣、松尾日銀総裁らが日銀副総裁の高橋是清を上座に^{いざな}誘い、欧米での資金調達の任に当たるよう^{いざな}拝み倒さんばかりに懇請した。高橋は「^{いざな}百方辞退」したと伝えられるが、余人に適任が居ないことも自明であり、遂に苦難の任務を受諾し、感極まった重臣たちと抱き合っ^{いざな}て泣いたという。その後、渡航前の日銀での壮行会でも、乾杯挨拶に立った井上は涙を流し、列席の者も暗涙に暮れたとされる。任務の重さを鑑みてのことであるが、明治の男子は純粋に感激性でよく泣いた。

2月25日、高橋は秘書役の深井英五ひとりを伴って渡米の途についた²⁾。

当時高橋が背負った任務について、その大変さを

1) 特技懇誌購読の方には先刻周知のことであろうが、特許庁の沿革は、1884年の商標条例により農商務省の工務局に設置された商標登記所が最初である。1885年の専売特許条例により専売特許所が並置され、1886年にそれらが統合されて専売特許局となった。高橋是清はここまでの所長、局長をいずれも初代として勤めている。外庁として特許庁になるのは1887年である。

2) 高橋らが乗った船は米国太平洋郵船のシベリア号であるが、実は別命を帯びた金子堅太郎と同じ便である。この二人が決して短くない航海の間に随分と意見を交わしたであろうことは想像に難くないが、それぞれの記録である「高橋是清自伝」にも「回想講演録」にも殆ど言及がない。不思議ではあるが、彼らの置かれた立場からすると、おいそれと記述できない事情があったのであろう。この二人は重大任務を受けるに当たって期せずして同じ条件を重臣に念押ししている。即ち、「任せる以上、自分のやり方に任せてほしい」と言うことであった。とりわけ、金融はどの系列、ブローカーを使うかなどを巡り自薦他薦がひきもきらない領域であり、ここでの折衝チャネルの一本化の念押しは、混乱を避け新興国の信用を担保するという意味では格別に重要であった。

説明することは容易ではないが、出発に際して是非にと切望された点が二つあった。ひとつはスピード、もう一つが確保すべき金額は1億円というものであった。金策の前提として、開戦時には戦費の総額は4億5千万円と見積もられていた。但し、1年に亘り朝鮮からロシア軍を一掃するまでの費用という積算であった。因みに、当時の国家予算（一般会計）規模は2億5千万円ほどであった。日清戦争においては、戦費の1/3が海外に流失したという経験則に立つと、1億5千万円の正貨が失われる見込みとなる。「正貨」というのは金のことで、当時我が国は金本位制³⁾を採用しており、全ての内外の経済活動の根幹は金の保有にリンクされていた。ところが、開戦時の日銀保有正貨は1億1700万円しかなく、仮に開戦となれば、日清戦争の経験に鑑みると、外国銀行による持ち出しが3500万円、輸入品の通常支払いが3000万円と見込まれ、これらを勘案すると5200万円の正貨しか残らないと試算された。

従って、その後の戦費海外流出を考えると、なお1億円の不足が生じるので、これを正貨が枯渇する前に外貨で調達せよというのが高橋に課せられた任務であった。勿論、戦時には金との兌換を取りやめるという選択肢もあり、第一次大戦のときには列強も一斉に金本位制から離脱（金輸出停止）した。しかし、この時の日本においては増税と国内起債（内国債）だけで戦費を賄うだけの余裕がなく、海外からの資金確保が不可欠であった。そうであれば尚更のこと、国としての「国際信用」の証でもある金本位制の維持は必須であった。いわば、戦費の海外調達には、金本位制の足枷をクリアするために金本位制に固執するという苦しくも皮肉な対応を強いられたのである。

尤も、1億円という金額については、国内には紙幣が流通しておりその兌換用にも金準備が要るから、本当はもっと多額の外貨が必要な筈であるが、海外での資金調達の困難性を予見したのか、高橋が命じられたのは1億円の調達であった。



高橋是清像と高橋是清邸（東京赤坂 高橋は赤坂に自宅があり、二二六事件はこの地で起きた。のちに母屋は移築され、庭などの佇まいを残し今は高橋是清記念公園となっている。彼の像は公園の正面入口から見て左奥にある。敷地隣は在日カナダ大使館である。赤坂から移築され、戦時の空襲を免れた自宅母屋は、小金井市の「江戸東京たても園」にそっくり残っている。歴史に興味のある人には必見の史跡である。）

しかし、元々その意味での額が過少にすぎ、結果的に戦争は1年で終わらず戦線が拡大したこともあって⁴⁾、以後の高橋への任務は追加の連続となる。実際には、最終の軍事費は20億円弱（各省の臨時事件費を含む）にまで膨らむこととなる。

少し先を急ぎすぎたが、高橋に課せられた公債発行は、最初の1億円だけでも苦難の連続であった。高橋と深井はホノルル、サンフランシスコ経由で3月17日にニューヨークに到着した。二人を待っていたのは、横浜正金銀行ロンドン支店長山川からの「ロンドンでの外債募集の見込みなし。正金銀行に鑿一文の信用なし。」との電報であった。正金銀行というのは日本と置き換えてもよく、ロンドンでは、日本政府の国際的信用がない、返済能力がないと看做されているから相手にされないという意味であった。米国に着いたばかりの高橋一行にこんな電報をよこしたのは、ロンドンは無理だから、こちらに来ないで米国で資金調達してはどうかとの趣旨であった。これも無体な話で、国際金融市場の王者ロンドンでダメなものを、外国公債に慣れない新生のニューヨーク市場で⁵⁾できるはずもないのである。先に高橋へのタスクセッティングで「海外での資金調

3) 我が国は、銀本位制を経て松方財政の下で金本位制を導入した（1897年）。不平等条約の解消のための列強に比肩する制度作りの重要な要素であったが、紆余曲折があり、最終的にその実現に大きく寄与したのは日清戦争で獲得した賠償金（3億6千万円）であった。

4) 戦費の見積もりは当事者によって、また試算時期によっても幅があった。参謀本部の中でも当初の段階では部門により5～8億円の幅があり、日銀では開戦4ヶ月経過後には10億円という新しい試算をしている。しかし、それらは1904年内の休戦・講和を前提にしており、結果的には10億円ですら甘い見積もりであった。

5) 今をときめくウォール街を擁するニューヨーク市場も、当時は外債といっても、フランクフルト債と米国・メキシコ金債の2つしか取り扱いない小さなものであった。

達の困難性を予見したか……」と書いた。我が国はこれ迄に海外での起債の実績がなくはなかったが、その数少ない既発債の価格は開戦後ロンドンで下落を続けていた。とても纏^{まとま}った額の起債ができる環境ではなかったのである。

しかし、どんなに厳しくても、調達できないという結果は許されなかった。ダメと言われても、ロン

ドンに行かない選択肢はなかった。ロンドンでは、早速に、林董^{はやしただす}駐英公使⁶⁾、山川横浜正金支店長、更に先に欧州入りしていた末松謙澄⁷⁾などと状況分析を行った。しかし、日本公債の下落は止まらず、ロンドンでの金融関係者との話し合いは、はかばかしい進展を見なかった。ロシアに立ち向かう日本の壮挙にシンパシーは覚えるが、「ポケットは別」というのが金融関係者の正直な感触であった。彼らの多く

日露戦役に係わる国際重要事項と高橋の動き（時系列表）

明治	西暦	月日	国際重要事項	高橋是清の動向
22	1889		明治憲法発布	
25	1892			高橋是清 日本銀行入行
27	1894		日清戦争（～1895）	
30	1897		日本、金本位制導入	
31	1898		露、遼東半島租借、満洲支線敷設権獲得	
33	1900		義和団事件	
35	1902		日英同盟	
37	1904	2.1	対露宣戦布告	
		2.25		高橋、深井 出発
		4.13	旅順口外、マカロフ露提督戦死	
		4.30	鴨緑江の会戦	
		5.3		高橋、シフと会交
		5.11		第1回日本公債発行
		8.10	黄海海戦	
		9.4	日本軍遼陽入城	
		10.22	北海にて「ハル事件」	
		11.14		第2回日本公債発行
38	1905	1.1	旅順陥落	
		1.22	露「血の日曜日事件」	
		3.10	日本軍奉天占領	
		3.29		第3回日本公債発行
		5.27	日本海海戦（～5/28）	
		7.11		第4回日本公債発行
		9.5	ポーツマス条約締結、日比谷事件	
		10.12	桂・ハリソン協定	
		11.28		第5回日本公債発行
39	1906	1.15	桂・ハリソン協定破棄	
		3.31	鉄道国有法公布	
		9.10	南満州鉄道、第1回株式公募	
40	1907	3.22		第6回日本公債発行
		5.10		高橋、深井 帰国

6) 林董駐英公使は、高橋より4歳上の下総佐倉藩士で、実兄は司馬遼太郎「胡蝶の夢」の主人公として描かれた陸軍軍医総監松本良順である。幕府から英国に留学派遣される前に横浜のヘボン塾（のちの明治学院）に通い、そこで高橋と机を並べた仲である。函館五稜郭で捕虜となったが、語学力を買われて岩倉使節団に加わり、内務省を経て外務省に奉職し、日英同盟の締結にも功績があった。以後、ロンドンでの高橋工作の心強い支援者となった。日露戦争の後、小村と入れ違いに外相に就任した。

7) 末松謙澄は豊前国出身の政治家で、法制局長官のほか義父である伊藤博文の下で通信大臣、内務大臣などを歴任した。高橋とは、若き日の高橋がガイド・フルベッキ（キリスト教オランダ改革派の宣教師）の家に居候した頃からの知り合いで、お互いに漢学と英語を教えあった仲である。英国オックスフォード留学の経験もあり、日露開戦に当たっては、欧米での好日世論形成のための広報活動の重要性をいち早く見抜いて献策し、それが自らの欧州派遣、金子の米国派遣に結びついた。

は日本が戦時において金本位制の維持ができなくなるのではないかと懸念しており、また戦争は結局ロシアに分があると見ていたのである。しかも1億円というオーダーは決して小さくなかった。当時の為替レートでは、1億円は1000万ポンド(=5000万ドル=1億ルーブル)に相当した。日英同盟と言っても、英国政府が日本の公債を保証するなどということはあり得ず、民間銀行としては短期の少額融資を担保付きで提供するというアイディアくらいしか提起できなかったのである。

そうした絶望的な状況に観念したか、4月に入り「少額の私募債でもいいから至急に資金を集めよ」との訓令が届く。本国の正貨事情が切羽詰まってきたのである。公債ではなく大蔵省証券の発行が動き始めた。これには、パーズ銀行、横浜正金銀行、そして香港上海銀行が銀行団⁸⁾を構成して当たった。ここに至る過程で少額融資などを提案したベアリング商会、チャータード銀行は参加を見送った。しかしながら、4月21日における銀行団の提案は、「期間3年、4%クーポン、200万ポンド(但し、100万ポンドまでは正味手取り93ポンド/100ポンド、200万ポンドまでは正味90ポンド/100ポンド)」でしかなかった。大蔵省証券は原則1年であり、これを期間3年としたとはいえ短期に違はなく、ビルは所詮ビルであったし、1000万ポンドのノルマには程遠かった。

ところが、このあとドラマチックに思える展開が待っていた。

4月21日、大蔵省証券の発行の外には手がないと観念し始めていた高橋は、個人金融人カッセル卿からの使いだとするヘンリー・R・ビートンなる株式仲買人の訪問を受けた。ビートン曰く「日本の公債発行には是非とも一流の金融アドバイザーが必要である。アーネスト・カッセル卿は、英国王エドワード7世とも近く、ロンドンではロスチャイルド、ベアリング商会と並ぶ実力者である。アメリカのJPモルガ

ンにも話のできる人物であり、日本のアドバイザーに相応しい。(彼を通じて)英米を巻き込んだ巨額の借款を持ちかけるべきである。」「もしも日本が海戦同様に陸戦でもロシアを打ち負かす決心なら、借款はその時まで待った方がよい。但し、待っている間にも準備はしておいた方がよい。」

なんとも意味深な物言いである。もとより戦費調達には額のまとまる借款(公債)に若くはないのであり、大蔵省証券に食い足りなさを感じる高橋は、この口上に新たな可能性の閃きを感じ取り、一挙に公債発行に舵を切った。ビートンの言う「ロシアを打ち負かした海戦」というのは、戦いというには小規模であったが、旅順口外での日露の小競り合いの最中、ロシア太平洋艦隊長官で世界的に有名な提督マカロフの座乗するロシア戦艦ペトロパブロフスクが、日本海軍の敷設した機雷に接触し、マカロフもろとも轟沈したことを指していた⁹⁾。また、準備というのは投資家宛の目論見書など公募のためのドキュメンテーションを示唆していた。流石に、公債規模は1000万ポンドを一度には無理と見て、最初は500万ポンドの部分発行とした。しかも担保に関税収入を当てざるを得なかった。

同行の深井らが日に夜を継いで日本への連絡、ドキュメンテーションの確認などに勤しみ、1000万ポンドの半分ではあったが、遂に公債による資金確保第一弾の目途がついたのである。

その成功を祝って、5月3日に高橋の旧友であるユダヤ系金融商社であるスパイヤー商会ロンドン支店長ヒルの家で、夕食会が開催された。そして、その席で高橋はシフという名前のたまたま隣に座りあわせた米財界人と懇談し日本の事情などを話して別れたのであるが、翌日そのシフから、残り500万ポンドをシフの主宰するクーロン・ローブ商会が引き受けるとの驚愕するような申し出を受けるに至るのである。

シフなる人物とは、3日の夕食会では高橋はもち

8) この時銀行団を構成したパーズ銀行のロンドン支配人シャンド氏、香港上海銀行のロンドン支配人キャメロン卿について付記しておきたい。シャンド氏は若き日の高橋が語学研修と称して横浜の銀行に出入りし、そこでボーイとして支えた人物であり、双方にとってロンドンでの再会は格別であった。キャメロン卿とは現在の英国首相の曾祖父にあたる。

9) このマカロフ提督の戦死は世界中に報道されたが、米国遊説中の金子堅太郎がこれに対して深甚なる哀悼の意を表して我が国における武士道的礼儀を体現し、対日世論を好転させたのは前稿の通りである。この時欧州の日本外交筋でも同様な姿勢を取り、賞賛を勝ち得ている。



ジェイコブ・H・シフ像
(ウィキペディアより)

ろん初対面であり、実は名前を聞き損なってシッフという別の英財界人と混同するくらいであったし、話といえば金策の話というより、日本人の国民性や戦争への取り組みなどの話題が中心であった。よって、一夜明けての残余債の受託の申し出に、高橋が「天佑なり」とするのも無理からぬところであった。事後的に、シフが米国におけるユダヤ金融界の大立者であり、かねてロシアのユダヤ人迫害に深刻な危惧を覚え、その政治的、民族的な彼の対露嫌悪が日本への支援の背景になったという解説がなされ、この「偶然の邂逅の美談」が流布するに至っている。

確かにシフは、彼からの提案が1904年4月頃の窮地に陥った我が国正貨事情に一息入れさせ、またのちに述べるように続いての起債にも多大の協力をし、我が国の戦争遂行・勝利をもたらしたという意味で、一大功労者には違いない。しかし、高橋らが幸運と感じた偶然の出会いは、果たしてシフにおいてもそうであったのだろうか。また、その後の高橋の胸中はどうであったのか。

その話題に入る前に、ここで少し欧米における金融界の構造と意向を概観してみよう。当時ロンドンの有力金融機関といえば、ロスチャイルド、ベアリング商会が二大勢力であり、いずれもユダヤ系である。また、アメリカにおいてはJPモルガンが勢力を伸ばしていた。これはユダヤ資本ではなく、むしろ典型的なWASP資本というべきか。いずれもマーチャントバンクからインベストバンクの機能を強化しつつあった。これら銀行と並んで、所謂個人金融

人という形の資産家も活躍しており、先ほど登場したカッセル卿、シフなどがそれに該当する。彼らはお互いに提携、離脱を繰り返しながら、有力な投資先を巡って熾烈な競争に明け暮れていた。当時、先進国向け投資の期待収益率が伸び悩みをみせ、新しい投資先として新興国が注目され始めていた。その新興国の中であって、日本はある種理想的な条件を備えた国であると映った。勤勉な国民を擁する立憲君主国であり、金本位制を整備し、鉄道などインフラ整備の需要に富んでいた。また、当時日本は国内の外国資本投下による不動産取得などに制約があったものの、その制度改正にも聴く耳を持つ国柄は、彼らに魅力的に映っていた。実際において、我が国はベアリング商会からの鉄道抵当法案のドラフトを受け取ったりしている。この件は、このあと別の展開を見せる話題で再度触れたい。

金融人同士の連携という意味では、カッセル卿とシフは特に親密で、日頃からお互いに行き来をし、夥しい数の通信を交わしあっていた。その中には、日本の起債の話題も当然にあったであろう。

そこで、思い出して欲しいのが、カッセル卿の意を受けたビートンの高橋訪問とその二週間後の夕食会でのシフとの邂逅の情景である。

確かに、新規投資先として魅力的であっても、大国ロシアに挑む新興国日本の行く末に懸念は払拭されず、「女王陛下の銀行」とまでいわれたベアリング商会ですら、日本への投資には二の足を踏む状況であった。しかし、独特の情勢判断から、シフは早い段階から日本への金融支援を構想していた気配がある。先に彼が米国におけるユダヤ人社会のリーダーであったと述べた。彼は日露開戦前の時期のニューヨークのユダヤ商人会の席上で「72時間以内に日本はロシアと戦争を始めるだろう。日本はファイナンスが必要であり、私はこれに応じようと思う。」と明言している。ユダヤ社会からの日本への支援はニコライ皇帝の気分を逆撫でして彼を一層のユダヤ迫害に追いやる危険性もあったが、それを恐れるより、少しでもロシアを弱体化させる方が得策だろうとの判断であった。

しかし、金融人としては日本が負けてしまっただけで困るのである。そこでカッセルを通じビートンをして、「借款の時期を待て」と言わしめたのであろう。

更に、夕食会の席でシフが高橋と会った5月3日は、鴨緑江の戦いで黒木為禎大將率いる日本軍がロシア軍を破った4月30日の直後である。これは欧州でも大きく確報として報道された。この時点でシフは「条件揃えり」として決断を実行に移し、高橋に近づき、翌日の500万ポンド引き受け伝達に及んだのである。夕食パーティで「たまたま」隣に座り合わせたなんてあるはずはないのである。シフは高橋の隣席目掛けて真っ直ぐに歩み寄ったはずである。

このあと、1000万ポンドの公債発行の条件は、香港上海銀行のキャメロン卿、クーロン・ローブ商会のシフ、それにちゃっかりと最後に首を突っ込んできたベアリング商会のレベルストーク卿が3者で協議して切り回した。この間、文字通りディールメーカーたちの跳梁をよそに、主幹事であったはずのパーズ銀行やら横浜正金銀行などは、全くの蚊帳の外であった。クーロン・ローブ商会の参入が伝えられると、あれほど冷淡であったロンドン市場は掌を返したように沸騰した。「あの抜け目のないクーロン・ローブが、目をつけたのなら儲かるに違いない。」と。言わば、シフの参入によりディールに「箔がついた」格好となった。ディールメーカーにしてみれば、「してやったり」である。

一方、高橋の感慨はどうであったか。ともかくも課せられた1億円の調達を果たし、しかも米国とも渡がついたということの意義は大きかった。しかし、率直に言ってかなり厳しい条件での発行である。前後するが、高橋は日本を出る前に内々に起債条件を示されているのだが、それと比べても日本に不利な点が多い(次頁の比較表参照)。それでも、背に腹は替えられないのである。一刻も早く資金を確保し

ないと、必要物資の輸入に支障が出て戦争遂行ができなくなるのである。前後して入った電報によれば、準備正貨はついに8000万円程度になり、準備率は22%にまで落ち込んでいた。一般に目安とされていたボトム準備率は30%程度であり、これは既に明らかに危険水域であった。

一方、公債の発行条件は決して有利ではなかったが、高橋が得たものも小さくなかった。彼はゼロの状態から挑んだ世界の金融マーケットというものがどのように動くのかを肌身で感じ取ったのではなかったか。短期証券から本格ボンドへの切り替えの意味、市場への仕掛けのタイミングの重要さ、そして新興勢力として投資家に何を提示しないといけなさを学習したのでなかろうか。条件面だけでなく、初めての起債において高橋らは主導権を発揮したとは到底言えない。むしろ翻弄されたという方が適切な有様であった。天佑だと喜んでいる陰で、彼らの知らないところでことは進み、それはパーズ銀行などにとっても同じであった。本当に市場を切り回すディールメーカーの凄まじさを目の当たりにしたのである。しかし、発行条件の悪さは、裏返せば投資家の利益であり、「初お目見え」の起債者としては、最初はその悪い条件に甘んじることが必要であったし、結果的に、それは投資家への次に繋がる名刺代わりであった¹⁰⁾。

最終の起債の詳細は、後述の別掲の表の通りである。半分をロンドンで、残りはニューヨークでの発行である。ロンドンでは、パーズ銀行、香港上海銀行、横浜正金銀行が、ニューヨークではクーロン・ローブ商会金融グループ(クーロン・ローブ商会、ナショナル・シティ・バンク、ナショナルバンク・オブ・コマース)が引き受けた。

10) この「名刺代わり」はその解釈にもよるが、かなり投資家に甘かった。そのことは、売り出し初日からプレミアムが付き、店頭で債券を求める異例の長蛇の列ができたことでもわかる。この時の日本起債が人気を呼んだのには、幾つか要因がある。徐々に伝わる日本の会戦勝利の情報や本文に述べたクーロン・ローブ参入のインパクトもさることながら、担保として関税収入が明記され、それが支払い利息の3倍もあることから安心感があつた。更に、最初からプレミアムを生むほどの価格の安さが好感された。とりわけ、当時のロンドンでは、購入金額が分割払いであったので、最初の少額振り込みで債券を入手でき、早くからプレミアムを活用して売買利益を上げることができたのである。言わば、レバレッジの効いた優良案件であったのである。

なお、同じ時期のロンドンにおける他国の起債の内容と比較すると、表の通りであり、この時期の我が国の世界での国家評価の有り様が伺われて興味深い。今の感覚で見ると、こんな国よりも不確実性が高いと思われていたのかと意外な気持ちになるが、当時の新興のアジアの小国への認識は、よくも悪しくもこの程度であったのであろう。高橋の苦勞の程が偲ばれる。

1904年ロンドン起債の外国政府債の評価

発行政府	発行時利回り(%)	発行価格* (%)
エクアドル	5.88	68
キューバ	5.15	97
ギリシャ	4.76	84
中国	5.13	97.5
メキシコ	4.26	94
日本(5月)	6.42	93.5
(11月)	6.63	90.5

*発行価格とは、発行時における額面に対する取り分
鈴木俊夫「日露戦争研究の新視点」より作成

第一回の起債にみる彼私の思惑

	日本政府よりの希望条件	起債内容
クーポン (利率)	5%以下	6%
金額 (ポンド)	1000万 (分割可)	1000万
期限 (年)	55年	7年
政府手取 (%)	96%	90%

ただ、ドキュメンテーションの最終段階はちょうど鴨緑江会戦の直後であり、国内は沸き返り、事実それを梃子に発行条件の改善を交渉せよという訓令が高橋たちを悩ませた。事情を知る林公使が「交渉の前面に立った高橋を信頼せよ」と敢然と弁護に回ってくれたが、国内対策上は、発行条件の事実上の折衝が鴨緑江海戦の前に既に決まっていたとするニュアンスを出す必要に迫られた。是清の自伝や深井の手記などを仔細に読むと、これほどのエポックメイキングな経緯なのに、この間のクロノロジーに曖昧さを残す記述になっており、意図的な前後調整の形跡を窺うことができる。

こうして、兎にも角にも任務は立派に達成されたのであるが、発行条件などが国内で報道され始めると、危うい正貨事情などつゆほども知らず、戦勝の知らせに湧く国民・マスコミからは、公債発行交渉ぶりを問題視する声が上がってきた。高橋は一旦帰国しての国内向けの釈明・説明を希望したが受け入れられず、代わりに、「残留の上、更に2億円ほどの資金調達をせよ」との指令が届いた。しかも、第一回の起債から一か月余しか経っていないまだ6月の中旬のことであった。当然最初の起債の分割払い込みも完了しておらず（最終は8月下旬）、「もう発行はない」と現地新聞記者に啖呵を切った手前、高橋は「どの面さげて」と頭を抱えざるを得なかった。

戦況は悪くはなかった。旅順沖の黄海海戦でロシア太平洋艦隊に大打撃を与え、遼陽の陸戦でもクロパトキンを背走させた。しかし、戦線はすでに朝鮮国境を超えて満州に広がって戦争は長引き、補給線の延長とともに費用も嵩んできた。またもや、国庫

の資金が底をつき始めていた。しかも、日本公債はその価格が意外なほどに戦況の良さに反応せず、むしろ日本の戦争継続を危ぶむ気配に押され、大きく売られる展開となっていた。

このような状況下、流石に前回より有利な条件での起債を臨むのは困難であった。本国とのやりとりで、市場との関係で少し間をとるべしとの高橋の意見が受け入れられ、また軍事行動との連携で第二回の旅順総攻撃(の成功)を待って起債するべしとなった。しかし、11月に入ると旅順攻撃の失敗の報が伝えられ、もう待つべき材料のない高橋は債券募集に入ることにしたのだが、それと前後して「ハル事件」と呼ばれるバルチック艦隊によるハブニングが生じた。この時バルチック艦隊は日本海までの回航途上にあつたが、北海上で英国の漁船を日本の水雷艇と見間違えて誤射し、そのまま逃げ去るという失態を起こしたのである。これが英国の世論を沸騰させ、日本支援の機運とともに日本公債の価格は少しずつ持ち直す幸運に見舞われたのである。第二回の起債は第一回と同様のメンバーによる引受で、ロンドン、ニューヨークで600万ポンドずつ、総額1200万ポンドの規模でなされた(11月24日)。その入金直前の正貨準備率は21.1%であり、綱渡りの事情は全く変わりがなかった。

高橋らは12月8日、漸くに認められた帰国の途につき、翌1905年1月10日に横浜に到着した。11ヶ月ぶりの祖国であった。その間、旅順要塞の陥落があり、国内は歓喜に満ちていた。当然のことのように、新聞論調は高橋に対して辛辣であった。「軍が破竹の戦勝を遂げているのに、発行に手間取った挙句、同じような業者ばかりを使って安い価格での発行に甘んじた」云々と言った調子であった。東京に戻った高橋は、元老の井上、松方、桂首相、松尾日銀総裁などに帰朝報告し、参内もしている。彼らに多言は無用であった。高橋の苦勞はよくわかっており、その業績を嘉して彼を従四位に叙し貴族院議員に勅選している¹¹⁾。その上、正式に「帝国日本政府

11) 高橋の叙位とともに、彼が起債で世話になった欧米金融人にも叙勲の沙汰がされている。ペアリング商会のレベルストーク卿に勲一等瑞宝章、ジェイコブ・H・シフに勲二等瑞宝章、香港上海銀行のジャクソン卿に勲三等瑞宝章など数名が対象になっている。シフよりもレベルストークの方の扱いが高いのは、形式上クーロン・ローブ商会のアメリカでの引き受けがロンドンからの下請け的な位置付けになっているからだと思われる。専門用語で言うと、ロンドンがプライマリーでニューヨークがセカンダリーという整理であろう。実態から言うとこのシフの評価には違和感があるが、のちに本文でも触れるように彼は再度の叙勲の榮に浴する。

特派財務委員」に任命している。名誉なことではあったが、その肩書きが与えられたのは、高橋の任務がまだ終わっていないことの証左であった。早速翌1月下旬には首相官邸に呼ばれ、伊藤、山縣、松方、井上の元老を前にして、桂首相から「もうあと2億円ないし2億5千万円の追加公債募集」を要請されている。高橋の苦勞を知る彼らにしては「これが最後の外貨募集にする」覚悟であった。逆に言えば、今回の募集でもって戦争を終わらせないと、勝っても負けても財政はもたないという緊迫した認識であった。

新しい任務を帯び、高橋は深井に新たに書記を一人加えて、2月17日に再び旅立った。3月の6日にはバンクーバー経由でニューヨークに入っている。そして、早速にシフと起債の算段に取り掛かっている。先に最初の起債のあとの高橋の心境に触れた。カッセルやシフといったディールメーカーの遣り口に翻弄され、忸怩たる思いをした彼には、今回は期するところがあった。言わば、最初の2回のプロセスは、彼にとって「修行と経験」の機会であったのであり、その教訓を生かすべく、彼は投資家との「間合い取り」を変えた。すなわち、「発注者、顧客は此方だ」という対応¹²⁾を改め、投資家、特に有力金融人の懐に飛び込み、積極的に対話する大切さを実践するとともに、時局をより一層注視してタイミングを図ることに注力するようになった。

やや前後するが、1904年12月の待望のロンドンからの帰国に際し、途中わざわざニューヨークに立ち寄り、シフの一家と親しく交歓し、シフの娘婿の兄であるドイツの有力マーチャントバンクのマックス・ウォーバーグ、JPモルガンのパートナーであるコナントとも面会している。ここまで書くと意外であるが、カッセル卿とはその際のシフの晩餐会で初めて会っている。短い滞在であったが、シフとはまさに「ウマが合い」、昵懇の間柄になっている。このウォーバーグとの関係は、結果的に第3回の起債ではドイツと英国との微妙な思惑の差により結実しなかったが、のちのドイツの参画の伏線になっていく。

また、短い期間での小刻みの少額起債を繰り返す

印象を避けるため、要請の枠を越えて3億円の纏まった規模にまで起債額を膨らませることとした。更に、タイミングという意味では、1月22日に所謂「血の日曜日事件」が起きてロシア国内の混迷が増し、3月10日には奉天への日本軍入城が報道され、ジリジリと起債の環境が整うのを見逃さなかった。ロシアはその大国性のゆえに、ずっとその公債の価格は下がらず、利回りは低いままであったが、日本の公債と2%以上もあったスプレッドの差がついにゼロになったのもこの頃である。

今回は、ニューヨークでシフと大枠の起債条件を詰めて彼と「握り」、その後ロンドンに渡ると、いつもの銀行団だけでなく、ベアリング商会のカッセル卿をも招集している。今回は、完全に高橋がイニシアティブを握っての折衝であった。起債は3月29日。条件は別掲の通りであり、クーポンといい、償還期限の長さといい、規模といい、内容は断然改善されている。

こうして満足のいく起債を成し遂げたし、5月末には日本海海戦での大勝の知らせも届いた。高橋は今度こそ帰国し、お役御免になることを期待した。しかし、好事魔多しである。3億円(3000万ポンド)の公債発行の後、日本国債の価格は再び下落に転じた。奉天の会戦は日本の勝利ではあったが、ロシア



高橋是清と深井英五（ロンドン滞在中の写真「高橋是清自伝」より）

12) この辺の対応の変化を具体的に記すことは難しいが、象徴的な事案を一つ挙げるとすれば、500万ポンドの引き受けの提案をもたらしたシフから会いたいと言われた高橋は、未だシフをシフとして認識していないこともあってか、「会いたければ会いたい方が来れば良い」と言い放ったことが分かり易いかもしれない。ヒヤヒヤする使いの者や深井をよそに、結局大富豪のシフを自らの安ホテルまで来訪させている。それが高橋にとって、シフをシフとして認識する最初であった。

軍は余力をもって退却し、本格決戦の構えを見せていたし、何よりニコライ皇帝に「自国が負けている」という感覚がなく、講和の糸口が全く見えていなかった。最前線は、児玉源太郎が「これ以上戦争は無理だ」と上申するような状況であって、現地に兵を貼り付けておくだけでも膨大な費用を要した。日本国内では国民に実態は知らされていない。だが、日本よりむしろ欧州の方が、こうした機微には敏感であった。更にイタリアで建造中のアルゼンチン向けの2隻の最新装甲巡洋艦を急遽購入する手筈となり、これは日本海海戦を控える海軍艦隊の重要な補強・体制強化策として持て囃されたが、正貨管理の観点からは出費として馬鹿にならなかった。また、国内債¹³⁾も多くを望めなくなりつつあり、いずれにせよ、改めて海外資金調達の上積みが必要となっていた。

松尾日銀総裁からは、更に3億円を調達すべしとの訓令が届く。訓令指示の金額を超えての大成功の3回目起債からまだ2ヶ月半の時である。訓令では、戦後の整理国債との名目になっているが、講和も出来ていないのに整理国債であるはずはなかった。この頃は、アメリカではまだ金子がルーズベルトに講和会議主宰を画策している最中であつた。この指令を受けた高橋の胸中や如何であつたらう。意を決して、シフに追加の資金調達の相談を持ちかけるしかなかった。「舌の根も乾かぬうち」というのはこのことである。是清自伝では、快く相談に応じてくれたとあるが、そんなはずはなく、深井の手記には困惑したシフとのやりとりを伺わせる記述がある。

それでも最後は、シフは協力を約束する。「講和はまだだが、講和協議中も20万人の兵力維持は必要だし、日本の資金不足(チョーク)を見透かしてロシアが強気に出ないようにするためにも見せ金が必要」との苦しい高橋の説明に、シフはついに首を縦に振った。そこまで濃厚な個人的関係ができていたとも言えるし、シフにはドイツを巻き込むことでリスクを分散しつつビジネスを広げるといふ思惑もあった。高橋とシフはシフの娘婿の兄であるドイツのウォーバーグに電報を発し、3億円のうち1億円

をドイツで引き受けられないかと打診をした。OKの回答は瞬く間に届いた。まるで映画でも観る気分であるが、電報はハンブルクでヨットレース観戦中のウィルヘルム二世皇帝のお召艦に財界人たちと一緒に同乗中のウォーバーグの元に届いたのである。艦内で彼は電報を皇帝に見せ、「やってやれ」の言葉を得るや、同乗中の中央銀行総裁以下金融の要人に話を回し、あつという間にドイツ銀行、ドレスナー銀行など13行からなる引受団をアレンジしてしまった。英国はまたもやドイツの参加に難色を示したが、ダメなら米独だけでもやると強気で交渉し、最終的に米英独の布陣によって3000万ポンドの起債を実現させる。かねてロシアを支援してきたドイツの日本陣営への参加は象徴的であつた。4回目の募集開始は7月11日のことである。その頃小村寿太郎外相はポーツマスに向けて航海中であつた。まさに交渉者への力強い側面援護となつた。

ここで少し時間を進めて、この後に続く本当の意味での整理国債の発行についての高橋の活躍を追って行きたい。ポーツマス条約が締結されて日露戦役は終了するのであるが、賠償金の獲得がならなかったのは周知の通りである。条約の結果を不満とする日比谷の焼き討ち騒乱などにより既発債の下落を心配させる場面もあつたし、正貨管理の観点からは、賠償金がない以上、膨れ上がった外債の負担軽減は急務であつた。戦前における国債費(内国債分を含む)の予算に占める割合は12%程度であつたが、戦後は30%程度にまで膨らんでいる。特に早い時期に発行した海外債券の利率は高く、これを低利のものに借り換えようとするのは当然の対応であつた。しかし、短期間に相当量の起債をしたためロンドンの市場には飽和感があり、いつものロンドンの銀行団は乗り気でなかつた。

そこで、高橋は新たにパリの市場に着目する。フランスはロシアとの関係が深く、長年その起債を手助けしていたが、ロシア国内の混乱からこれを手控えるようになっていた時期であつた。であるが故に尚更、それ以上ロシアを刺激しないよう外交的な配

13) 我が国の国内債は決して不調だったわけではない。国運を左右する大決戦に協力するという国民の意識は高く、しかも国内での物価コントロールと不急支出の抑制を通じて余剰資金の提出環境の維持は巧みにマネージされていた。しかし、日露戦争以前には未償還の公債は6億円を超えていなかったが、開戦とともに募集を開始された戦争用の国内債の募集は、1年余りの間に5回に及び、累計は4億8000万円に及ぶ額に達していた。

慮を重視し、日本公債の引き受けには慎重であった。しかし、高橋はロンドンのNMロスチャイルドが動くなら、パリのロスチャイルドも協力に吝かでないとの感触を掴んでいた。ロスチャイルドは、公式には交戦中の国家に対しては発行銀行にはならないとの立場であったが、シンジケートには参加したりしており、急速に存在感を増した日本債券に関心がないわけではなかった。経緯から、自己を排除して進む起債のフォーメーションに自尊心を陰らせていただけであった。この辺の呼吸は高橋が欧州の金融人との交流を通じ会得したものであり、「ここまでベアリング商会やカッセルとは経緯があって世話になってきたが、ロンドンではやはり取引先としてロスチャイルドの名前が欲しい」とかき口説き、まずロンドンのNMロスチャイルドを、そしてパリのロスチャイルドを動かすことに成功する。こうして整理国債は大型の5000万ポンドとする仕切りが成立し、まずその半分の2500万ポンドを国内債の借り換え相当として発行することがまとまった。そして残りを6%クーポン外債の借り換えとして保留することとし、前者が5回目の募集、後者が6回目の募集となった。5回目の募集は、1905年11月28日付とし、1200万ポンドをパリで、1300万ポンドを米英独で按分引受とした。利率は4%、期限は25年である。

そして最後の2500万ポンドの処理のため、高橋らが欧米に渡ったのは、1906年の9月のことであった。しかし、アメリカの所謂1907年恐慌の兆しを感じ取ったシフが今度ばかりは乗り気でなく、従ってドイツ勢も動かなかった。若干の紆余曲折はあつ

たものの、利率を1%上げることを条件に、前回のつてを活用してロスチャイルドを中心に英仏で引き受ける形で処理を完了した。1907年3月のことであった。同年5月10日、高橋、深井は本当に今度こそ、全ての任務を完了して帰国した。

ここまで長々と戦費調達のための高橋の奮闘ぶりを書いてきた。勃興期のインベストメント金融の真髓に接し、当初の苦戦を糧にして、数々の交友・人脈を生かしながら、矢継ぎ早の資金調達課題に立ち向かった使命感とバイタリティには、頭が下がる思いがする。

任務を帯びてから3年3ヶ月の間、都合太平洋を6回、大西洋を8回横断し、1億3000万ポンド（戦時中8200万ポンド、戦後借換え4800万ポンド¹⁴⁾、日本円総額12億7000億円相当）の資金を調達したのである。日露戦争の戦費支出は18億7000万円と言われているから、借り換え分の評価が難しいから単純ではないが、戦費の約半分相当の額が高橋による調達で賄われたと言えるのではなかろうか。

前稿では、異郷での「パブリックリレーション」を通じて国運を開いた金子堅太郎を取り上げたが、高橋是清は、生馬の目を抜くような国際金融場裡で、「インベスターリレーション」に活路を見出して必要資金の確保に奔走し、国運をかけた戦略遂行を支えたと言える。

よしあしの中に掛かりし高橋を
渡りて聞かむ雁金の声

高橋是清の手掛けた公債発行一覧

回	時期	発行額 (ポンド)	年利 (%)	担保	期限 (年)	発行銀行 (国)
第1回	1904年5月	1000万	6.0	関税	7	英、米
第2回	11月	1200万	6.0	関税	7	英、米
第3回	1905年3月	3000万	4.5	煙草専売金	20	英、米
第4回	7月	3000万	4.5	煙草専売金	20	英、米、独
第5回	11月	2500万	4.0	無担保	25	英、米、独、仏
第6回	1907年3月	2300万	5.0	無担保	40	英、仏

「昭和財政金融史」より作成

14) 6回目の借り換えにおいては、発行価格が高かったため、正味の手取りが増え、発行枠を200万ポンド節約できたため、借換え総額は4800万ポンドとなった。

苦勞して金策を果たしたのに無責任な批判に晒される高橋に対し、元老の井上薫が激励に送った句である。庭園の情景に寄せて「よしあし(簀、葦)」は、評判の「善し悪し」にかけ、「雁金」は「借入金」にかけて、日本の財政を支える欧米との「高い架け橋」になれとの意味を込めている。表題はここから取った。

高橋はその後1911年には日銀総裁に就任し、1921年に首相にもなり、その前後で農商務大臣や何度にも亘り大蔵大臣の重責を担い、昭和の金融恐慌、金輸出再禁止はじめ多くの政策に治績を残した。とりわけ自らの外債発行によるものも含め、日露戦争によって膨らんだ歳出の縮減、殖産興業拡大への資金の優先振り分けとそれ以外の支出の抑制、繰延に尽力した。その姿勢は、一貫して経済における実践・実装を旨とし、「国力以上の施設を為さないようにする」というものであった。軍備についても、戦後の身の丈に合うよう抑制しようとしたのだが、それを不満とする若く血気にはやる陸軍将校らに咎められ、彼の妻をして「無残というより、卑怯でございます」と嘆じさせるような二・二六事件の悲運に見舞われた(1936年、享年83歳)。

さて、先に、外債発行のクロノロジーをつなぐために、一部時計を早回しして飛ばした時期がある。第4回の起債以降の部分である。実は、この時期にポーツマス条約締結後の日米間では重大な事案が持ち上がっていた。アメリカの鉄道王ハリマンが、日本が日露戦争によって獲得した南満州鉄道への経営参画を意図して、桂首相との間に「桂・ハリマン協

定」を結んだのである。この構想は、前稿の最後にも触れたように、条約交渉から帰国した小村寿太郎の大反対で陽の目を見ないで終わったのだが、ここには満洲経営にかかわる政府内部の深刻な方針の対立があり、実は高橋は借り換えの周旋に勤しむ傍ら、本件にも深く関わりを持っていたのである。

この間の経緯を時系列で追うと分かりにくいので、やや乱暴であるが、大体の構図を示すと次のようになる。

まず大事な伏線は、ハリマンとシフの関係である。ハリマンは、南満州鉄道に関心を持つもっと前の米大陸での鉄道ヘゲモニー競争の段階で、シフからのファイナンス支援を何度も得て伸べてきており、当時の有力なインベスト案件である鉄道事業を通じ、両者は親しい関係にあった。そんなこともあり、高橋はシフと昵懇になる過程で彼からハリマンを紹介されている。また南満州鉄道への具体の経営参画の構想に接した際も、戦後経営における満洲での日米共同は、実態的にもファイナンス的にも自然な発想と得心していた。従って、ハリマンが1905年8月に訪日するに際しては、事前に政府関係者や渋沢栄一、岩崎小弥太といった財界人との会合への事前の口添えを行なっている。また、こうした認識は井上、伊藤といった元老においても共有されており、桂首相との協定も自然の流れであった。彼らが、この構想に賛同したのは、講和におけるルーズベルトへの恩義やアメリカでの資金調達の前提で「満洲の門戸開放」を唱った経緯もあったが、何より再び南下を企てるであろうロシアへの牽制に米國資本の存在が大きな効果を発揮すると認識していたことにある。

一方、これは少し後から陽表化するのであるが、満洲経営には異なる方針を持つ勢力があった。このシリーズの前の方の稿で褒め上げた児玉源太郎の人物イメージを崩しかねないので記述を慎重にしないといけないのだが、彼とその腹心である後藤新平は、全く異なる満洲経営像を描いていた。後藤の筆による「満洲経営策梗概」という企画書によれば、「鉄道経営という体裁で地域全般の施設設計を行うとともに、鉄道経営機関とは別に租借地の統治機関を整備する」として「鉄道経営の主体として満洲鉄道庁を、統治機関として遼東総督府を以ってする」としている。この満洲鉄道庁がのちに南満州鉄道株式会社



高橋是清墓(東京多摩霊園)

(満鉄)になるのだが、簡単に言えば、満洲版の東インド会社のような形態で、満洲の「植民地経営」を構想していたのである。

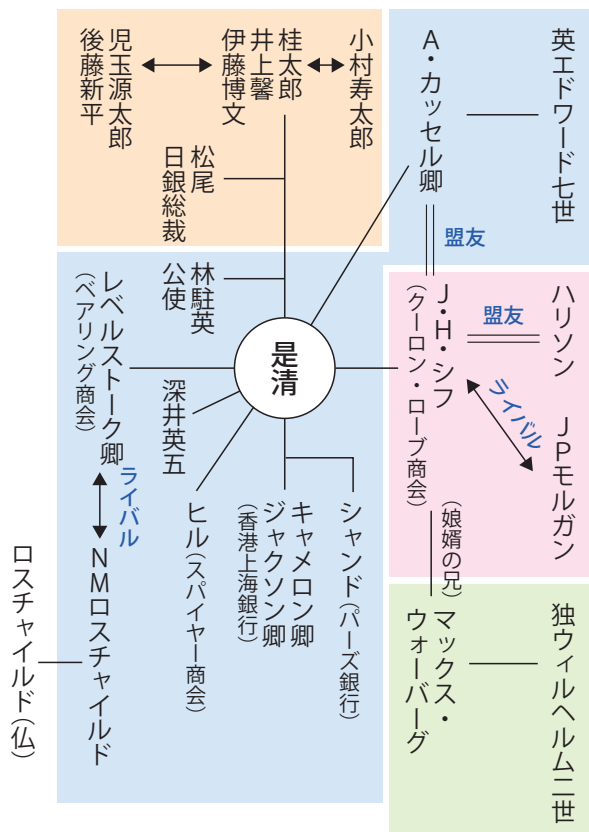
前の稿でも述べたが、兎玉はバランスに富んだ人格者で、国力に見合った軍隊に留めるとの考えから日露戦争後の陸軍拡張案にも断固反対するような人物であった。しかし、彼は、同時に、台湾の植民地経営を実地で成功させた人材でもあり、何より総参謀総長として戦争を切り盛りし、多くの犠牲を出しつつもギリギリのところまでロシアを食い止めた軍人としては、南満州鉄道とはまさに日本人の血涙の賜物であった。これに米国の鉄道王が半分も出資をして経営に口出しするというような案は到底許容し難いものであった。こうした感覚と「門戸解放」とは相入れないのである。先にベアリング商会が鉄道抵当法案のドラフトを持ち込んだという件に触れた。その法案は手直しをされ「担保付き社債信託法」という形で帝国議会を通過した。しかし、これによ

て外国資本が鉄道債券のみならず一般株式をも購入するにつれ、軍の輸送機微が漏れるのではないかと、産業基盤が外国人に買収されるのではないかとこの危惧が高まった。そんな機運を背景に、バラバラな私鉄をまとめて国有化するという鉄道国有化法案が可決され、最大のインフラ案件である鉄道を含め外資の導入は大幅に限定されることとなった¹⁵⁾。

こうした根本的な方針の対立を底流にして、事案は小村全権代表の帰国によって新局面を迎える。日比谷の焼き討ちに代表される彼をスケープゴート化する傾向は甚だしく、騒然とした雰囲気の中で戻った彼には、幾つかの懸念材料があった。

まず第一は、国内民衆の凄まじい怒り、批判への対応であった。もとより国土であり我が身については覚悟があったであろうが、帰国するまで国内に残した家族の安否すら定かでないという状況は彼をひどく消耗させたし、交渉責任者としては交渉で勝ち得た遼東半島や鉄道の価値を減ずるような措置は自らの成果を貶めるに等しかった。さらに事態を混乱させるように、シフのライバルでもあるJPモルガンからは鉄道への参画に融資を以てするという提案がもたらされた。出資と融資とでは経営上の影響力、そして政治的意味合いの差異は歴然としており、出資を前提とする協定は捌きの難しいものであった。

彼にとっては、「桂・ハリマン協定」の内容は肯首する訳にはいかないものであった。彼にとっても、兎玉にとっても「満洲の利権は10万人を骨にして贖ったもの」であった。されど首相の関与した協定である。無闇に否定することは外交官の沽券に関わる。幸い協定書へのサインが保留されていた上、ロシアとの条約書には日本が管理する鉄道への第三者の参画には清国の了解が必要との条項があるため、それを盾にとって、日米だけでは決められないという断り口上を編み出した。確かに、日露で勝手に清の領土に関わる取り決めを行なったのであるから、条項自体は尤もなものであったが、恰も清国から了解がとれないから御趣旨に添いがたいとするような立論は、政治力学上はやはり詭弁であった。元老に



是清をめぐる相関図

15) この鉄道国有化法案については、井上薫、高橋是清、加藤高明をはじめ渋沢栄一など財界人からも過剰な私的財産権の侵害として反対の声が上がった。しかし、政友会などは国有化されれば、政治主導の鉄道誘致で地元誘導ができるとの思惑から賛同する立場であった。外資の産業基盤買収への危惧といい、鉄道敷設の政治利用といい、昔からやっていることは変わらないなあと苦笑を禁じ得ない。

も小村に対する負い目があり、ついに米国、ハリマンには言を左右にしながら、なし崩し的に構想を葬るしかなかった。高橋は、ハリマンの不満を受けたシフとの関係がギクシャクし、苦しい弁明を強いられることとなった。6回目の借り換えに際して、市況への不安からシフが受け入れ銀行団から外れたのは先に述べたとおりであるが、ハリマンとの協定実行の不調が一因であったかもしれない。

結果、この協定は正式に破棄され、満州における地政はアメリカから見ると、ロシアが日本に入れ変わっただけで、中国への利権の足掛かりは果たされず、ルーズベルトをも対日強硬路線に追いやることとなり、太平洋戦争に繋がる緊張を生む原因の一つとなった。

「……長蛇を逸したか……？」

以上が高橋是清にとっての日露戦役である。稿を綴り終えるに当たり、彼を取り巻いた関係者のいくつかのその後にも簡単に触れておきたい。

まず、シフである。彼のクーロン・ローブ商会は個人色の強い国際金融プレーヤーであったが、ドイツからの資金源の比率が高かったこともあり、第二次大戦後は勢いを失い、1977年にリーマン・ブラザーズに買収された。そのリーマンもその後姿を消し、クーロン・ローブを窺わせるモノは今や全くない。シフ自身はビジネスと共に一貫してロシアのボグロム（ユダヤ人の大量虐待）に反対し、帝政ロシアへの資金提供を市場において徹底的に妨害した。帝政打倒の為に資金援助したうちに、ユダヤ人のトロッキーなどがいたため、「ユダヤ人＝ボルシェビキ」との連想が生まれ、「ユダヤ人は資本主義、基督教国を転覆する意図がある」という陰謀説すら囁かれたが、怯まなかった。ロシアに挑む日本を「神の杖」として支援した。戦後の1906年3月日本に招かれ、改めて勲一等旭日大綬章を授与された。1920年、ニューヨークにおいて73歳にて死去。

ロンドンの金融の雄ベアリング商会は、「女王の銀行」であるとともに、アメリカのロンドンにおける代理人としてルイジアナ、テキサスの米国買収などのファイナンスに活躍したが、1995年シンガポールでのデリバティブ取引の失敗で倒産。

続いてハリマンであるが、彼に国策や政治的意図は希薄で、純粋に鉄道が好きで事業をそれだけの思惑で構想した事業家である。その後も世界一周の鉄道網を敷設する夢を追い続け、1909年に死去している。

そして、最後に名脇役の深井英五である。高崎藩の名家の出であるが、生家は没落。のちに近傍の上州安中藩出身の新島襄の関係で同志社に進み英語力の研鑽を積む。その同志社の同窓である徳富蘇峰と知り合い、彼の国民新聞社に入社したが、蘇峰の紹介で松方正義大蔵大臣の秘書官になり、そのあと松方から更に紹介されて日銀に入っている。高橋の補佐役として海外渡航を共にしており、彼が記した「高橋是清の外債募集事蹟」は「回顧70年」とともに貴重な資料となっている。のちに我が国で最も経済理論、貨幣論に精通した国際金融人として活躍し、日銀総裁としても重きをなした¹⁶⁾。



深井英五氏像（日銀総裁退任に際し安井曾太郎画伯に依頼して描かれた肖像画。書齋に座し、まさに言葉を発しようとする姿を描いたとされ、安井画伯の代表作の一つとして、東京国立博物館に収蔵されている。）

16) ここまで書き進むと、高橋の前半生の紹介はどうなっているんだと言われそうであるが、出生から横浜正金銀行までの軌跡を追うだけでも一冊の本ができてしまうほど、ドラマチックで波瀾万丈である。奴隷に売られた話、ペルーでの鉱山開発の失敗など有名な話も多いが、時系列で追いたいという向きには、自身も編纂に関与した「高橋是清自伝」か、家族との話題が多くてやや小説性が高いが幸田真音の「天佑なり」を読まれることをお勧めする。

なお、この間の我が国、世界の金融動向については、坂谷敏彦「日露戦争、資金調達戦」がおすすめである。高橋はもとより政府首脳の間に加えて、米欧の金融資本の盛衰や日露戦争の局面解説なども立体的に盛り込まれていて、大層興味深い。本稿でも随所で参考にさせていただいた。